

ウエルタと日本

マデロ大統領の家族を公使館に匿っていることに対し、ウエルタの使者が堀口九萬一公使に礼を述べに来た。それに対し公使は、もし大統領家族の誰かが銃弾で傷つくようなことがあれば不名誉である故、気をつけてもらいたいと言い、さらに我々がマデロ氏家族を庇護するのは何ら党派的感情からではなく、すなわち大統領の家族としてではなく、単に我が親愛なるメキシコ人の友として同情したまでのことである、と公使は応えた。さらに、もし貴下が今日のマデロ氏のような状況になるようなことがあれば、我々は進んで貴下の家族を保護すると付け加えた。それに応じてウエルタや新政府要人が丁重な礼を言ってきた。公使は八方手を尽くして食料を集め、滞在中マデロ家族一同には十分に満足してもらえた。公使は家族が国外へ出発するにあたり、列車でベラクルースまで同行し、家族が乗船するまで見届けた。¹¹

ウエルタが政権を握るなり、英独仏西は直ちに政府を承認した。ウエルタの良き助言者である米国大使ヘンリー・レーン・ウイルソンの影響が各国公使へ及んでいたのと、何よりもマデロ革命政府に対する経済界の不信感が払拭されたことが大きく作用し、ヨーロッパ諸国がすんなりとウエルタを承認した。日本政府がそれに追随したのも当然の成り行きであった。ウエルタにとって不幸であったのは、マデロ殺害から僅か二週間後に就任したウイルソン大統領がウエルタを篡奪者と決めつけ、承認を拒んだのみならず、あらゆる手段を講じて妨害をし続けたことである。数年後、第一次大戦終了時のパリ講和会議に於いて、この理想主義的外交政策を振りかざすウイルソン大統領は、日本の全権大使の前に立ち塞がることになる。ウエルタもウイルソンに徹頭徹尾反抗した。

悲劇の十日間のあと、カリフォルニア日系人の間でメキシコに対する関心が高まるのを受けて、日米新聞は1913年3月3日から二十九回にわたり「墨国革命」と題したメキシコ革命の歴史を掲載した。その中で同紙は「日米問題の研究には必ず日墨関係が付帯し、日墨関係の研究には必ず日米問題が対照されねばならぬ」と述べている。そして、「而して、仮大統領ウエルタは墨国憲法上どうしても引き続き大統領たる事を得ぬのであるから、任期満了と共に退職するより外はない。去れば目下の処、好個の取り組みはディアスとパスケス・ゴメスである。中原の鹿、果たして誰が手にか帰す？」と締めくくった。¹²

日米新聞に表れた論調を見ると、加州在住邦人はウエルタ大統領をウエルタ君と呼んで、熱烈な声援を送った。彼等はウイルソン大統領がウエルタを窮状に追い詰めた張本人であるとして、加州排斥土地法により苦しめられている自分たちをウエルタと重ね合わせていた。日米新聞はウイルソンがウエルタ支持へ政策転換をすれば、メキシコは平和を取り戻せると考えていた。7月17日、日米新聞はウイルソン大統領が親ウエルタのヘンリー・レーン・ウイルソン駐墨大使を召還したことに関し、反ウエルタ政策を鮮明にしたとして警戒感を強めた。日本がウエルタ政府並びにメキシコ国民との緊密な関係を保つことを、ウイ

ルソンが妨害するのではないかと日米新聞は恐れた。メキシコや加州在住邦人は、日本がもっとウエルタ政府を援助し、メキシコ人が歓迎している日本からの移民をもっと送り込むべきだと熱望していた。独立国同士が緊密な関係を結ぶことに、米国政府が干渉すべきではないと論じた。これに対し日本政府は、墨国が対米政策上、一時日本を利用しているに過ぎない、という冷ややかな立場を表明していた。¹³

ウエルタが仮大統領に就任して間もなく、三井物産はウエルタへの武器売込みに成功していた。日本製小銃五万挺、騎兵銃二万五千挺、弾薬一千万発であった。¹⁴ この武器の受け取りにあたり、独立百年祭に日本から祝賀特使としてメキシコ市を訪問した内田康哉男爵一行への答礼もかねて、メキシコから日本への答礼大使が派遣されることになった。選ばれたのはフェリス・ディアスである。ウエルタはディアスが次期大統領に就任することを約束しながら、それを妨害するための人選であった。恐らくディアス自身もこれを受けなければ命が危ないと感じたに違いない。8月3日、フェリス・ディアス一行がサンフランシスコに到着した。アメリカの新聞は、老ディアスが亡命先から東京で甥と落ち合い、共にメキシコへ帰国するであろうと書きたてた。ディアスを受けるにあたり、日本政府は逡巡し、そして遂に受け入れを拒んだ。次期大統領と目されるフェリス・ディアスを答礼使節として迎えることにより、メキシコ政府に利用されるようになることを日本政府は恐れた。フェリス・ディアスはポルフィリオ・ディアスの仇を討つためにマデロを殺害した、などという誤った解釈を日本政府がしていたという。¹⁵

日本政府がディアス受け入れを断ったため急遽、フランス駐在大使レオン・デ・ラ・バッラが起用されることになった。ポルフィリオ・ディアスの国外逃避後、臨時大統領となった経歴を持つレオン・デ・ラ・バッラ一行は、三名の書記官及び陸軍大将マヌエル・ベラスケス以下六名の武官であった。使節は1913年12月25日、両陛下に拝謁した。最初の武器の出荷は、本船ロサンゼルス入港時、情報を握っていたアメリカ政府により没収された。アメリカ政府がカランサ政権を承認した後、貨物はメキシコ政府に渡された。¹⁶

この頃、ハースト系新聞、大企業、メキシコに利害関係のある議員などがメキシコ侵略を叫んでいた。憲政軍が占める北部とウエルタ政府軍の南部を分断し、アメリカの垂涎の的である、国境に隣接する諸州を奪おうとする、多くのマニフェスト・デスティニー信奉者がいた。ウイルソン大統領はこれらの圧力を抑える一方、ウエルタ政権を転覆するため全力を尽くした。反ウエルタ憲政軍への武器輸出を解禁し、メキシコ沿岸をアメリカの艦船で警戒した。この頃、日本とメキシコが親密な関係にあることにかこつけ、日本を敵視したセンセーショナルな新聞記事が後を絶たなかったことから、加州在住邦人はウエルタに熱烈な声援を送った。

11. 日米新聞、Sept. 26 and 27, 1913
12. Ibid. March 5 & April 5, 1913
13. Ibid. July through August, 1913
14. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990, P370
15. 日米新聞、Aug. 13, 1913
16. 日本人メキシコ移住史編纂委員会「日本人メキシコ移住史」、1971, P119